平成28年度第２回京都府総合教育会議議事録

１　日　時　　平成28年12月15日（木）午後４時から５時まで

２　場　所　　京都府立洛北高等学校　本館　１階　コモンホール

３　出席者　　山田 知事、小田垣 教育長、畑 教育委員（教育長職務代理者）、
　　冷泉 教育委員、平塚 教育委員、上原 教育委員、安藤 教育委員

４　議事内容

（１）知事あいさつ

（森下文化スポーツ部長）
定刻になりましたので､ただ今から今年度の第２回目の総合教育会議を開催いたします。
冒頭に当たりまして、山田知事からごあいさつをお願いいたします。

（山田知事）
今日は洛北高校にお招きいただきました。私は新校舎ができた時以来で、大変久しぶりです。本日は洛北サイエンスの授業などを見せていただけると思い、楽しみにしています。本当に高校は今頑張っていただいておりますので、このいい流れをつくっていきたいなと思っています。また、その中で京都らしい、力を持った子どもが育つように、今日も活発な意見交換になることを期待しておりますので、よろしくお願い申し上げます。

（２）学校概要説明（「洛北高等学校の概要・学力向上に向けた取組」めざせ知の創造～目指すのは「学びの質　日本一」）

（森下文化スポーツ部長）
今、知事からもお話がありましたが、初めて教育現場での総合教育会議ということで、現場を見ていただきながら、その中で教育についての深い議論を賜りたいと思っていますので、よろしくお願い申し上げます。
本日の趣旨ですが、まず今年度は生徒が希望する高校を主体的に選択できる新制度が誕生して、１年生から３年生までが揃いました。そこで、新しい制度で再スタートした高校における教育等の取組状況をまず御視察いただき、議論いただきたいと存じております。
視察に当たり、まず洛北高校の前川校長から学校の概要、また学力向上について御説明いただき、授業を視察後にこちらにお戻りいただき、意見交換をお願いしたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。
それでは、前川校長、よろしくお願いします。

（前川校長）

校長の前川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、本校の取組、特色等も含めて、簡単に御説明させていただきます。

洛北高校は、まず明治３年に、日本で初めての旧制中学としてできた学校です。平成16年にスーパーサイエンスハイスクールの指定と附属中学校の開設を同時に行いました。現在は、高校から入学してくる生徒のための文理コースが４クラス160名、同じくスポーツ総合専攻が１クラス40名。そして、中高一貫コースが２クラス80名。合計高校では１学年７クラスで授業を行っております。

「洛北の目指す教育とは」と、大上段で書かせていただいたのですが、学校規模と府立高校の特性から言って、我々は「国際基準の人物を育てる」をこれからのコンセプトにしていきたいと考えています。大学合格者数という評価もあるわけですが、洛北高校は「学びの質日本一」を目指したいということで、生徒に身に付けてもらいたい力を５つ挙げさせていただきました。これに基づいて、説明をさせていただきます。

まず“専門性”については、やはり主体的な学習、これはもちろん授業のレベルの高さもですが、授業以外の課外活動等においても生徒が興味・関心を持って高いレベルで学べるような取組を用意する。例えば「ラグランジュの会」は数学大好き人間の研究サークルで、不定期で開催しております。月１回、京都大学名誉教授に東京から来ていただいて、大学で学ぶ数学を中学生、高校生が一緒に学んでいます。中学生に「わかるのか」と聞くと、「わからない」と答えます。ただ、「帰って勉強します」と言って、何らかの質問を持って、次の会に参加する。そういう取組になっています。このサークルから、今年、京都大学の新しい特色入試で合格者が２名出ています。

また、“国際性”を高めるために、日英サイエンスワークショップやアジアサイエンスワークショップ、本校独自のグローバル人材育成プログラム等を実施しています。これについては後ほど御紹介します。

これはスーパーサイエンスハイスクール関連で「洛北サイエンス」授業です。中学１年生の生徒たちが生物実験室でダンゴムシの観察をしているところです。手づくり迷路の中でのダンゴムシの動きを想定して、法則性を発見しようとしているのですが、子どもたちの楽しそうな生き生きとした顔を御覧いただけると思います。こういった学びを、我々は１年生から提供しています。

先日、人工知能では東大に入学できないという新聞報道がありましたが、その研究のチーフをしておられました新井先生に毎年来ていただいて、「ロボットは東大に入れるのか」というタイトルで、現在の労働市場等も踏まえた講義を中学３年生が受けています。

これは今年から高校生を対象に始めた土曜日の課外授業で、深泥池の植物観察です。左上の写真は、発泡スチロールで飛行機の翼を、自分たちで厚さ、形等を考えて作っています。そして、風洞実験を行い、浮力、風の抵抗などを本校の教員が作った器具で測定して、再度改善を図るという実験を１年間かけてやります。

これは高校で、シンガポールの高校生との交流、あるいはイギリスの高校生との交流を、実験や議論などいろいろな形で行っているところです。

これは先程紹介しました本校独自のグローバル人材育成プログラムで、希望者を募って

３月に１週間余りアメリカに行きます。ハーバード大、マサチューセッツ工科大、スタンフォード大を訪問して、特別講義を聴講したり、英語で課題を出していただいて翌日英語で発表したり、現地で活躍しておられる日本人の講演を聞くなどの活動を毎年行っています。今年も30名余りの生徒が、既に事前研修に参加しており、３月に訪米の予定です。

さらに“日本人のアイデンティティー”を身につけてもらうために、例えば下鴨神社など、近くの文化遺産等も活用して、日本の文化、伝統に触れる取組をしています。左上は下鴨神社でのフィールドワーク、社会の授業をしているところです。真ん中は、知恩院の解体工事中に特別にお願いして中学生が見学させていただいています。左下は、下鴨神社の葵祭の前祭（さきまつり）の御蔭祭に本校の生徒が参加しているところです。

主な進学実績としては、27年度末で以下の実績を挙げています。東大の推薦入試１名、京大は現浪合わせて17名、国公立医大が６名、合計116名です。新しいタイプの入試として注目された東京大学の推薦入試で１名、京都大学理学部には全国で５名中２名を本校から合格させることができました。これは、単に受験勉強のスキルを学ぶ授業ではなく、洛北サイエンスのような探究的な学びを続けてきた成果だと考えています。

お手元にお配りした学校紹介の高校のページを御覧いただきたいのですが、２枚めくっていただきますと、高校からの文理コースのページがございます。上に「めざせ　知の創造！」と書いていますが、高校ではこの「知の創造」を一つの大きなテーマとして取り組みたいと思っています。その下に掲載しているカリキュラムのうち、「洛北サイエンス」はスーパーサイエンスの指定を受けて学校独自で作っている教科であり、その中に学校設定科目があります。１枚めくって右側が中高一貫コースの生徒のカリキュラムです。これも同じように「洛北サイエンス」という教科と、その中の科目を設定しています。

こうした取組の結果、今年は生物オリンピックで金賞、物理コンテストで敢闘賞と全国レベルの賞をいただき、スーパーサイエンス校200校が集まった研究発表会では、全国で６校のみが選ばれるポスター発表賞をいただきました。中学生は科学の甲子園ジュニアにおいて京都府の１・２・３位を独占しました。全国大会では筆記部門で第２位、残念ながら実験部門で少し失敗しまして、トータルでは上位に入りませんでしたが、優秀な成績を収めました。高校では、生物オリンピックと物理コンテストで賞をいただいたほかに、今年初めて科学の甲子園全国大会京都府予選会で名だたる有名校を押さえて優勝することができました。３月に筑波で開催される全国大会に出場いたします。

そのほか、京都大学が大学入学前の高校生を対象に探究的な学び教室を始めたＥＬＣＡＳや大阪大学のＳＥＥＤＳに本校から４名あるいは３名が選ばれて参加しています。将来、研究者として優秀な道を歩んでくれるのではないかと思っています。

卒業生を見ますと、中高一貫第１期生が今年ドクターコースの１年生になったのですが、そのうちの１名が大学在学中に学術誌「Nature」に論文が掲載されました。また、追跡調査では、本校の中高一貫コース卒業生80名の28～36パーセント、人数にして20～30名が大学院に進学するという結果が出ています。全国的に、一つの高校から大学院に進学する割合は数パーセントもない中で、この数字は特筆すべきことかなと考えています。

面白いところでは、今年は文部科学大臣杯の中学生囲碁大会で、全国個人・団体、両方で優勝し、２年前は『高校生クイズ』で本校の生徒がニューヨークの自由の女神の前で優勝しました。

部活動では以下のような活動を行っています。赤字はスポーツ総合専攻の指定部です。ハンドボール部は今年、男子が全国高校総体で３位に入賞いたしました。文理コース３年生で、陸上競技女子300メートルで全国３位に入った生徒もいます。そのほかにもボルダリングや、中学生ではアイススケートで全国大会に出場する生徒がいます。

こういった形で、文武両道と言うのは簡単ですが、質にこだわった教育、特に生徒たちが学びたいと思い、それで力をつけていくような教育にこだわって進めていきたいと考えております。

以上でございます。

（森下文化スポーツ部長）

ただいまの説明に対して御質問がありましたら、よろしくお願いします。

（小田垣教育長）

平成16年に附属中学ができて12年たっているのですが、中高一貫コースのカリキュラム、これは高校３年のカリキュラムですね。文理コースは普通科なので、このカリキュラムは基本的に共通項目になっているけれども、今の実情で課題はありませんか。

（前川校長）

現在、スーパーサイエンスハイスクールの指定が13年、３期目の最終年になっています。４期目の申請を今準備しているところなのですが、中高一貫コースの生徒の学びで言いますと、いわゆる理数系の専門学科を超えるような質の授業を実施できていると考えています。ただ普通科の枠で捉えると、レベル的には、あるいは探究的な学びをさらに提供しようと思うと、限界に来ていると感じています。

（小田垣教育長）

普通科で学校設定教科科目の一定の幅を持てるけれども、その枠内では難しいなという感じがしますね。

（前川校長）

はい。普通科の場合、専門科目を置く上限がございますので、その中でより専門的な教育をしていこうとすると、どうしても限界があるというのが正直なところです。

（畑委員）

生徒たちの通学の実情はどうですか。例えば、遠くから来ている子はどういったところから。

（前川校長）
　中学生は、一番遠い子は木津川市から来ています。また、亀岡地域からも来ております。高校生は、同じように山城地域、口丹地域からも来ていますが、高校から入学してくる生徒は90パーセント以上が地元京都市の生徒です。特に京都市の北半分の生徒が圧倒的に多いのが、本校の特徴かと思います。

（冷泉委員）
　中学校に一貫教育で入ってきた生徒たちと、高校から入ってきた生徒たちは、学校生活においてお互いにうまくいっていますか。

（前川校長）
　授業は別なのですが、２年生、３年生になった時の少人数の選択授業などで一緒に学ぶ可能性は残しています。クラブ活動は全く一緒ですし、例えば中高一貫の生徒とスポーツ総合専攻ではある意味で対極にあるわけですが、中高一貫コースの生徒は自分たちにできないような運動能力に対して一目置くところがありますし、スポーツ総合専攻の生徒は、中高一貫コースの生徒に対して学力面で尊敬をしている。本校の場合は、非常にいい形でいろんなコースの子が共同に生活してくれていると思っています。

（山田知事）
　中高一貫コースと文理コースは、本当にそういう形で分けたほうがいいという判断なのですか。

（前川校長）
　中高一貫コースは、中学２年生でほぼ中学校のカリキュラムを終えます。中学３年生で５教科は高校の内容に入るため、高校から入ってきた生徒に対して１年間のアドバンテージを持っていますので、なかなか一緒に授業ができないという現状がございます。

（山田知事）
　体育や古典も全部そうなのですか。

（前川校長）
　いや、体育や芸術は一緒にやっています。分けるのは５教科のみです。

（前川校長）
　もちろん必修ですが、講座に分かれますので。例えば、中高一貫コースは１・２組なのですが、３・４組の文理コースの生徒と体育は一緒にやる。スポーツ総合専攻は７組なのですが、５・６組の文理コースの子と７組の子が一緒にやると。そのような形で、大体半分に割って授業展開をしております。ですから、中高一貫のコースの生徒とスポーツ総合専攻の生徒が一緒に授業を受けることはまずないのですが、文理コースは両方の子と一緒にやることがあります。

（山田知事）
　進学実績は差があるのですか。

（前川校長）
　中高一貫コースの生徒の進学実績が高いです。京都大学を基準にして言いますと、中高一貫コースの生徒の大体15名程度が現役で合格します。高校から入ってきた文理コースからは１～２名。年によってはゼロの時もあります。ただ、文理コースも、大体４分の１強は現役で国公立に行っており、一定の実績を上げているのですが、より高いところを目指したいなと思っています。

（山田知事）
　僕は東京の中高一貫の私立にいたのですが、高校から入ってきた生徒とそんなに差がついていませんでしたけどね。

（小田垣教育長）
　洛北高校の場合は、高校段階が普通科の文理コースとなっており、特に京都の公立の場合は、普通科と専門学科で入試の要件が違いますので、そこがやっぱり大きいと思います。

（前川校長）
　前期で決まる進学系の専門学科に、学力の一番高い子がまず出願していくので。

（山田知事）
　そういう子は洛北高校には来ないのですか。
　なぜ専門学科を置かないのか。中高一貫をやっているのに。

（小田垣教育長）
　中高一貫のカリキュラムが、専門学科の理数科のカリキュラムになっていますが、普通科の制限がかかってしまうのです。学校設定教科の上限の枠がありますので。

（山田知事）
　なぜそんな設定があるのですか。

（小田垣教育長）
　普通科の場合は指導要領上の縛りがあるのです。中高一貫は高校段階で専門学科に変わるようなシステムでないと、今の洛北高校の現状には合っていない。やっている中身がそういうことですから。

（山田知事）
　何のための中高一貫なのか。そこを鍛えていけば、高校から入ってきた生徒たちも引っ張られていくと思うのに、わざわざ分離してしまったら、成果は半分ですよね。

（畑委員）
嵯峨野高校は高校だけですから、専門学科があるのです。

（小田垣教育長）
洛北高校が附属中を作って12年たちますので、そろそろ中高一貫の高校部分の組み換えなどの工夫は必要と思っています。

（山田知事）
堀川高校や西京高校は。

（小田垣教育長）
高校で専門学科を置いています。

（山田知事）
なぜ置けるのですか。
では、何で洛北高校はしないのですか。
何かわざわざ一番効果のある部分を外しているような気がするんだけど。

（小田垣教育長）
市教委とのいろんな調整もあり、私学もありますので。

（山田知事）
市教委は、専門学科を置いているのでしょう。だったら、何の調整をしているのですか。

（小田垣教育長）
全体の前期で採る枠をある程度持っていますので。

（畑委員）
西京高校も専門学科があるのですか。

（前川校長）
西京高校は中高一貫と専門学科の両方を設置しています。

（山田知事）
だから、効果を上げているのでしょう。

（小田垣教育長）
システム的には、そういう生徒を集めやすい形になっています。

（山田知事）
相乗効果になると思いますけれどもね。

（小田垣教育長）
はい。そこが次の検討課題だと思います。

（山田知事）
制度的に置けないのか、指導要領上のことで置けないのですか。聞いてもよくわからなかった。
専門学科と普通科は、枠が別に決まっているんですか。
それは指導要領で決まっているのですか。

（小田垣教育長）
はい。

（山田知事）
洛北高校も専門学科にすればいいのでしょう。

（森下文化スポーツ部長）
一旦授業を視察いただきまして、その後に議論をよろしくお願いします。

（３）校内視察（「洛北サイエンス」（数学・理科）授業）

（４）意見交換

（森下文化スポーツ部長）
いろんなご意見をいただいて、また次につなげたいと思いますので、よろしくお願いします。

（山田知事）
今日の午前中、ひきこもり支援団体の人たちと会っていたのです。ひきこもりの中にＩＱ150を超えるような子がいるのですが、コミュニケーション能力がないので外には出ていけない。どうやってその子の得意な分野での才能を伸ばそうかと。スティーブ・ジョブズだって発達障害と言われていますよね。アメリカはプラス面を伸ばすけれど、日本はマイナス面を伸ばそうとする。洛北高校に来るような子は全体の能力も高いからいいのだろうと思うけれども、そうではない子の中にもものすごく光る子がいると思う。そういう子はどうやって育てるのでしょうね。

（小田垣教育長）
清明高校は昼間定時制ですので、進級ではなしに２年までいきますが、学校に定着して

いろいろ能力を出す子が出てきています。

（山田知事）
国語は０点だけど数学は100点みたいな子はどうなるのですか。落第になるのですか。

（小田垣教育長）
高校の進級規程を作っていますので、その進級規程をクリアしないと原級留置になります。

（山田知事）
だめでしょう。結局、国語能力は劣ってしまっている子でも、数字ならできる子みたいな子はどうなるのでしょうか。

（小田垣教育長）
今のシステムでは普通科目の必履修科目がありますので、高校卒業までに基本的な単位はある程度取らないと。

（山田知事）
だめですよね。だから、何らかの才能があっても必修がとれない子はどうするんでしょう、教育の中で。そういう子も才能を伸ばせば、もしかしたら世の中で活躍できるかもしれないけど、どこへ行けばいいのでしょう。

（上原委員）
そうなると、現行の学校制度そのものに、やはりまだまだ考える余地があると。

（山田知事）
障害のある子の中にはすごい才能を持った子がいっぱいいるわけですよね。絵を描かしたらものすごい才能があるとか、スポーツをさせたらすごい才能がある。でも、そういう子は、高校教育で「あなたはだめよ」ということになっちゃうのが今のシステムですが、それはどうするのですかね。

（畑委員）
それをバックアップするためのプログラムは、行政全体としては教育委員会以外のことも含めて、普通はありますよね。

（山田知事）
でも、進学もできないというのは。

（畑委員）
大学への進学とか、そういう枠ははみ出てしまっていますよね。

（山田知事）
　それでいいのかという素朴な質問なんですがね。

（畑委員）
　私たちも実際現場に訪問して、すごく矛盾を感じるのは、やはり学校の先生の思いと家庭の思いです。先生は預かりたいけれども、家庭は「戻せ」というので、生徒が戻ってしまったりする。

（山田知事）
　やっぱりフリースクールみたいなところで伸ばすところだけ伸ばして、そこから大学にポーンと行けるようなシステムを作らなければいけないということですかね。

（小田垣教育長）
　大学入学試験の資格検定で基本的な科目が要求されますので、そこを変えない限り。

（山田知事）
　だから、そうじゃない大学をつくるということでしょうね。

（畑委員）
　そういうことでしょうね。

（上原委員）
　それはまさに高校の卒業証書や大学の卒業証書にこだわらない教育。

（山田知事）
　そういう面をどこかで作らなければいけないのではないか。それも教育委員会の仕事だと思うのですね。教育委員会は別に一定の子だけを教育する委員会ではなく、全ての子どもを教育する役目があるわけです、教育委員会には。ところが、今のシステムでは一定の子ははじかれちゃうわけです。

（上原委員）
　制度にはまらない人はね。

（山田知事）
　それは教育委員会としての制度からするとおかしいんじゃないかと思うのですけども。

（畑委員）
　難しい。基本的な部分は、教育委員会と文科省の取組の中でというのが。制度の問題は侵せない部分がありますからね。

（山田知事）
　人があって制度があるので、制度があって人があるのではないと思います。

（畑委員）
　わかります。

（山田知事）
　そういう人がいるから、その人に合わせた制度を作るのが行政の役目であり私どもの役目なので、制度があるから人がオミットされるというのは違うのではないですか。

（畑委員）
　だから、むしろ教育委員会だけではない、総合的な意味で行政のバックアップ体制がありますよね。

（山田知事）
　でも、教育委員会というのは、別に制度に応じてやるだけではないのではないかと言いたいわけですよ。

（畑委員）
　いや、もちろん私たちもそう思いますけれども、しかしながら、本務の仕事はやはり文科省の中で、もう98パーセントぐらいが。

（山田知事）
　そうすると、我々、知事部局がフリースクールみたいなものを作って、教育委員会とは別のバイパスを作ったらいいということですか。

（畑委員）
　いやいや、そうして欲しいと申し上げるつもりは全くないです。

（山田知事）
　じゃあ、そういう子供たちはどこへ行くのだろう。

（畑委員）
　いや、実際私たちも世の中を見ていて、「なるほどこういう受け皿もあるのか」と、本当に思います。

（山田知事）
　あるのですよね。

（畑委員）
　ありますよ。ものすごい充実したものも。

（山田知事）
　それを育てていかないと、今のひきこもりの数はむちゃくちゃ多いわけですよ、本当に。

（畑委員）
　具体的に言うと、洪陽学校などは教育委員会が関わってレベルアップした部分がものすごくある。でも、教育委員会の先生方の立場から言うと、残念ながら最後まで一緒にやることはできない。

（山田知事）
　それは仕方ないと思うのです。でも、だから、はみ出た子の対策はやらなくていいということとは違うわけですよ。

（畑委員）
　すごくやっています。

（山田知事）
　はみ出た子の対策を教育のシステムの中でどう作るのか。私は知事になった時、当時の教育委員会とフリースクール議論をものすごくやったことがあるのです。それで認定フリースクールができたわけです。ところが、今日話したら、いつの間にか認定フリースクールの予算がなくなってしまっていると。

（畑委員）
　それはどちらの管轄ですか。

（山田知事）
　教育委員会です。
　復活要求しないから、「それはもういいでしょう」となった。教育委員会認定フリースクールがある都道府県は珍しかったわけです。それなのに、いつの間にか削られていて。結局、教育委員会はそういう人たちを切り捨てているとしか思えなかったのですけどね。

（橋本教育次長）
　お金はなくなりましたが、つながりは継続していますし、フリースクールと非常に仲よくやっているのですけど。

（山田知事）
　向こうからすると、金もくれず、単に仲のいいだけではないかという。

（橋本教育次長）
　市町村と連携していくという仕組みに今変わりつつあるのです。この間法律が通ったので。だから、むしろこれからのほうが教育委員会とフリースクールの距離は縮まると思うのです。

（山田知事）
　でも、洛北高校では本当に少人数、３人ぐらいでやっているわけではないですか。もしものすごい才能を持つ子がいたら、あの中に入れてあげてもいいではないかと。「40人の中に入れろ」とは言わないけども、ああやってものすごく少数でやっているのだから。何教育というのでしたっけ。

（小田垣教育長）
　インクルーシブ教育です。
　清明高校で今２年までいって、そろそろ、そういう個性や能力が見えてきているんです。場合によってはここへ来て、あの中に入ることは考えています。一歩踏み出しはしているのです。

（橋本教育次長）
　多分、フリースクールという方法が一つあり、清明高校みたいな、ちょっと違うタイプの学校、それから発達障害に関しては、これから高校も通級指導教室を作っていくことになります。

（山田知事）
　その発達障害のクラスが、何か障害者に対するクラスみたいな雰囲気になっているのではないのかなと、これは直感的に思うのだけど。

（橋本教育次長）
　ベースは同じ教室で学びますので。

（山田知事）
　そうじゃなくて、ダイバーシティだと思うのですよね。

（橋本教育次長）
　そうです。

（山田知事）
　ダイバーシティの観点から、そうした子どもたちを見る姿勢が、今必要なのではと思うのです。確実に増えてきていますよ。才能があるのに、世の中に受け入れられないからひきこもりになって、40歳になっても閉じこもっている人も何割かいるというのです。もちろん精神病でそうなっている人もいるのだけど、でも、何か考えて連携を作らないと、結

局どこかで切り捨て教育になってないかと感じました。今日、授業を視察したら、これだけ少人数で、得意な才能を伸ばすことをやっている。だったら、ほかの才能は劣っていても、そういう子どもたちを拾っていくシステムが何かできないのかなと思いますよね。

（小田垣教育長）
　そういう意味では、大学の入試システムも今年はかなり変わりましたね。府大の推薦入試にしても京都大学の特別入試にしても、そういう個々の能力をきちっと見分けようみたいな制度に。従来のセンター試験の二次という枠組みとは違うようになりました。だから変化の兆しはあるのです。

（山田知事）
　兆しはあるのですけど、現実は非常に深刻なものだから。

（上原委員）
　今、知事さんがおっしゃるように、高校の卒業証書が貰えない子どもたち、学校に行けない子どもたちをどう救っていくか。それでも、本人は数学が抜群に出来るかもしれない。

（山田知事）
　もしかしたらものすごくね。

（上原委員）
　発想力がよかったり。

（山田知事）
　才能からいったら、我々なんか及びもつかないような才能を持っている子が、そういう中で切り捨てられているとしたらたまらない。

（上原委員）
　たまたま一つ、二つの科目が、極端に劣っているから卒業資格が貰えない。

（山田知事）
　たいていはコミュニケーション能力が劣っているんです。

（小田垣教育長）
　でも、現実に、高校の単位認定は、特別に能力が落ちるから、それだけで切り捨てるということではなくて、追認指導なんかは、その子に合わせたようなことをやって認定しますけどね。

（山田知事）
　結局、コミュニケーション能力が劣っているということは、相手の気持ちを考えられな

い。その代わりに自分のことだけ考えているから、その面ではすごい子かもしれないわけですよ。

（冷泉委員）
私も近いところにひきこもりの子を１人持っているんですけれども、才能はあるにしても、本当に難しいですね。

（山田知事）
難しいですよ。

（冷泉委員）
あの子を一緒に社会の中に入れていくということは本当に難しいと思います。教育はもちろん必要ですけどね。かといって、その一つの才能だけ伸ばして、どうやって社会の中で生かせるのかということになると、すごい疑問に思うことがありますね。人間として本当にどうしてこの子は将来生きていくのかということになると大問題ですね。

（山田知事）
それが増えているのですよ。

（冷泉委員）
いっぱいいます。本当に、私もその子たちを見ていて、才能を伸ばすということはすごく大切なんですけど､欠如しているところをプラスしてやりたいような気がしますけどね。幾らすごい才能があるとしたって、本当に社会の中に生きていく力がないですよね。

（畑委員）
みんなが同じパターンになるより、本当に一人ひとり個性豊かだから。

（上原委員）
最近はひきこもりの保護者もいて、子どもが幼稚園などに登園できないケースもありますよね。

（山田知事）
保護者がひきこもり？

（上原委員）
そうなんです。保護者が家から出られない。

（安藤委員）
アスペルガーの子どもは小さい時は個性的な子やなとなるのですが、やはり中学校へ行くと、集団生活を送るのが難しいケースもありますね。

（小田垣教育長）
　ただ、それも個性だとして捉えられると、結構居場所ができます。高校生になるとそういう認識を周りも持てるのですね。変わった奴というよりも、あれは個性なのだというふうに。

（山田知事）
　１人だけなら、あの子はちょっと変わってるなと思ったりするのだけど。

（小田垣教育長）
　だから、高校生の精神年齢では、その受け入れる分はあると思うのです。ただ、中学校とか小学校の高学年ぐらいで、違いを排除する意識をどうクリアさせるかはやはり課題だと。

（山田知事）
　インクルーシブ教育というのですね、それはね。

（小田垣教育長）
　はい。障害という言い方をせずに、個性が際立っているという言い方をしますのでね。

（畑委員）
　そういう人が書いた絵が評価されて、アーティストとして社会的に出てくる人もいる。でも、やっぱり本当にそれを支えている肉親がいるから、そういう生活ができているということもありますね。

（上原委員）
　難しいですね。

（森下文化スポーツ部長）
　予定の時刻が過ぎました。今年度４月に作りました大綱の中に、コミュニケーション能力の育成に関する内容が一応入っているのですけれども、確かにそれだけでは対応し切れない分があります。また今日も新しい視点をいただきましたので、次回は、また大綱等のいろんな宿題等の見直しも事務局で承っていますので、それらも含めまして、またテーマ等を決めまして協議していくということでよろしくお願いします。
今日はどうもありがとうございました。